

2013年ROF予習会《ギヨーム・テル》(1995年ROF上演映像使用)

★1995年ロッセーニ・オペラ・フェスティバル上演(会場:パラフェスティバル)

演出・舞台・衣装:ピエル・ルイー・ピッツィ 指揮:ジャンルイー・ジェルメッティ

シュトゥットガルト放送交響楽団、ブラハ室内合唱団、クラクフ・ポーランド放送合唱団、バレエ:アレクサンドラ・フェッリ&ホセ・マヌエル・カレニョ(プリンシパル)、キューバ国立バレエ団(ソリスト:ラファエル・リベロ)

配役:ミケーレ・ペルトウージ(テル)、ダニエラ・デッシー(マティルデ)、グレゴリー・クンデ(アルノール)、イルデブランド・ダルカンジエロ(ヴァルテル)、フロード・オルセン(メルクタール)、エリーザベト・ノルベルク=シュルツ(ジェミ)、リッカルド・フェッラーリ(ゲスレル)、ジェフリー・フランシス(ロドルフ)、ポール・オースティン・ケリー(リュオディ)ほか

《ギヨーム・テル(*Guillaume Tell*)》鑑賞の手引き 水谷 彰良

題名 《ギヨーム・テル (*Guillaume Tell*)

劇形式 4幕のオペラ (opéra en quatre actes)

作曲 ジョアキーノ・ロッセーニ (Gioachino Rossini, 1792-1868)

台本 ヴィクトル=ジョゼフ=エティエンヌ・ド・ジュイ (Victor-Joseph-Étienne de Jouy, 1764-1846) 及びイポリート=ルイ=フロラン・ビス (Hippolyte-Louis-Florent Bis, 1789-1855) [註]

第1幕: 全11景、第2幕: 全7景、第3幕: 全4景、第4幕: 全11景、フランス語

註: 初版台本は MM. Jouy et Hippolyte Bis と記載。全集版序文はハイフンとアクサンのない Victor Joseph Etienne de Jouy と Hippolyte Louis Florent Bis を使用するが、その選択は疑問。なお、追補者にアルマン・マラスト (Armand Marrast [Marie-François-Pascal-Armand Marrast], 1801-1852) とアドルフ・クレミュー (Adolphe Crémieux, 1796-1880) を挙げる文献もあるが、基本的にはド・ジュイとビスの2人を台本作家とすべき。

原作 ヨハン・クリストフ・フリードリヒ・シラー (Johann Christoph Friedrich Schiller, 1759-1805) の劇台本『ウィルヘルム・テル (*Wilhelm Tell*)』(1804年5月17日ヴァイマルの宮廷劇場初演)。実際はそのフランス語訳(アンリ・メルル=ドービニ Henry Merle-D'Aubigny 訳, 1818年)や、ジャン・ピエール・クラリス・ド・フロリアンによる散文詩《ギヨーム・テル》(1801年)を参考にして作成。

作曲年 1828年春~1829年6月以前(その後、初演前の稽古中の改訂と改変、初演後の改訂・改変あり)

初演 1829年8月3日(月曜日)、王立音楽アカデミー劇場[サル・ル・ペルティエ] (Théâtre de l'Académie Royale de Musique [Salle Le Peletier])、パリ

人物 註: 役名の発音は上演や演奏によって異なり、主なそれを注記する。

ギヨーム・テル Guillaume Tell (バス、F-g) ……スイスの共謀者

マティルデ [またはマティルド。註] Mathilde (ソプラノ、b-c^{'''}) ……スイスの統治者となるべきハプスブルク家の皇女 註: 1995年ROF上演は歌唱部分に「マティルデ」を適用し、レシタティブでは「マティルド」とも発音、パッパノーの録音は「マティルド」と発音。

アルノール [またはアルノルド。註] Arnold Melcthal (テノール、B b-c^{'''}) ……スイスの共謀者 註: 1995年ROF上演は「アルノール」、パッパノーの録音は「アルノルド」と発音。

ヴァルテル・フルスト Walter Furst (バス、E b-e') ……スイスの共謀者

メルクタール Melcthal (バス、E-e') ……アルノールの父

ジェミ [またはジェンミ。註] Jemmy (ソプラノ、b-c^{'''}) ……テルの息子 註: 1995年ROF上演は「ジェンミ」、パッパノーの録音は「ジェミ」と発音。

ゲスレル [註] Gesler (バス、F-f) ……シュヴィッツとウーリ州の総督 註: フランス語読みは「ジェスレル」だが、1995年ROF上演とパッパノーの録音共に「ゲスレル」と発音。

ロドルフ Rodolphe (テノール、b-b^{'''}) ……ゲスレルの巡査長

リュオディ Ruodi (テノール、b b-c^{'''}) ……漁師

ルートルド Leuthold (バス、G b-e') ……羊飼

エドヴィーゲ Hedwige (メゾソプラノ、g-a b^{'''}) ……テルの妻

狩人 Un chasseur (バス、G b-e')

他に、3人のフィアンセとその仲間、三つの州の男女の農民、ドイツの騎士、小姓、皇太子妃の女官、狩人、ゲスレルの衛兵、オーストリアの兵士、男女のティロル人たち。バレエ団とそのソリストたち。

管弦楽 1ピッコロ、2フルート、2オーボエ／1ホルン・イングレーゼ、2クラリネット、4ホルン、4トランペット、2ファゴット、3トロンボーン、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、鐘 (campana)、タムタム、2ハープ、舞台上の4ホルン、弦楽合奏

演奏時間 序曲：約12分 第1幕：約75分 第2幕：約54分 第3幕：約60分 第4幕：約35分

註：カットや楽曲の選択によって演奏時間は異なる。上記は1995年ROFバージョンで、通常は3時間半前後。

自筆楽譜 フランス国立図書館 (Bibliothèque nationale de France)、パリ

全曲初版 Troupenas, Paris, 1829. (総譜とピアノ伴奏譜)

全集版 I / 29 (M. Elizabeth C. Bartlett 校訂, Fondazione Rossini, Pesaro, 1992.)

構成 (全集版に準拠。1995年ROF上演はオリジナル・バージョンの復活も行ったので若干異なる。これについては別記する)

序曲 [Ouverture] : ホ短調、3/4拍子、アンダンテ〜4/4拍子、アレグロ〜ト長調、3/8拍子、アンダンティーロ〜ホ長調、2/4拍子、アレグロ・ヴィヴァーチェ

【第1幕】

N. 1 導入曲〈今日は晴れると空が告げている！*Quel jour serein le ciel présage!*〉(ジェミ、エドヴィージュ、アルノール、リュオディ、ギヨーム [・テル]、メルクタール、スイス人の合唱)

N. 2 レシタティフ〈人里離れた私の家が、日中の暑さから *Contre les feux du jour que mon toit solitaire*〉(アルノール、ギヨーム [・テル]、メルクタール)、アルノールとテルの二重唱〈どこに行く？ なにがお前を動揺させるのだ？ *Où vas-tu? quel transport t'agite?*〉(アルノール、ギヨーム [・テル])

N. 3 行進曲、レシタティフ〈我らの頭上に太陽が輝き *Sur nos têtes le soleil brille*〉(エドヴィージュ)と合唱〈世界を飾る天よ *Ciel, qui du monde es la parure*〉(ジェミ、エドヴィージュ、アルノール、リュオディ、ギヨーム [・テル]、メルクタール、スイス人の合唱)

— 合唱の後のレシタティフ〈またもゲスレルだ！ *Encor Gesler!*〉(ジェミ、エドヴィージュ、アルノール、ギヨーム [・テル])

N. 4 舞踏付きの合唱 [Chœur dansé] 〈イメネ [結婚の神]、あなたの日が *Hyménée, ta journée*〉(スイス人の合唱)

【ディヴェルティスマン (Divertissement)】

N. 5 パ・ド・シス (6人の踊り) [Pas de six]

N. 6 舞踏付きの合唱 [Chœur dansé] 〈テルの息子に栄光と名誉を！ *Gloire, honneur au fils de Tell!*〉(ジェミ、エドヴィージュ、スイス人の合唱)

— ディヴェルティスマンの後のレシタティフ〈蒼ざめ、震えながら、やっと身を支え *Pâle et tremblant, se soutenant à peine*〉(ジェミ、エドヴィージュ、リュオディ、ギヨーム [・テル]、ルートルド、メルクタール、兵士の合唱)

N. 7 第1幕フィナーレ [Final 1er] 〈善なる神、全能の神よ！ *Dieu de bonté, Dieu tout-puissant!*〉(ジェミ、エドヴィージュ、リュオディ、ロドルフ、メルクタール、兵士の合唱、スイス人の合唱)

【第2幕】

N. 8 合唱〈なんと野性的な *Quelle sauvage harmonie*〉(一人の狩人、狩人の合唱、羊飼いの合唱)

N. 9 レシタティフ〈やっと彼らが遠ざかる…彼に見覚えがあるのが判ったわ *Ils s'éloignent enfin...j'ai cru le reconnaître*〉とマティルデのロマンス〈暗い森、人けのない、悲しく荒れ果てた野よ *Sombre forêt, désert triste et sauvage*〉(マティルデ)

— ロマンズの後のレシタティフ〈私が来たことは、たぶんあなたにとっての侮辱でしょう *Ma présence pour vous est peut-être un outrage*〉(マティルデ、アルノール)

N.10 マティルデとアルノールの二重唱〈ええ、あなたは私の魂から奪いました *Oui, vous l'arrachez à mon âme*〉(マティルデ、アルノール)

— 二重唱の後のレシタティフ〈人が来ます、お別れしましょう *On vient, séparons-nous.*〉(マティルデ、アルノール、ギヨーム [・テル]、ヴァルテル)

N.11 三重唱〈ヘルヴェティエ [スイス] が処刑場になる時 *Quand l'Helvétie est un champ de supplices*〉(アルノール、ギヨーム [・テル]、ヴァルテル)

N.12 第2幕フィナーレ [フィナル] 〈広大な森の奥底から *Des profondeurs du bois immense*〉(アルノール、ギヨーム・テル、ヴァルテル、ウンターヴァルトの住民の合唱、シュヴィツの住民の合唱、ウーリの住民の合唱)

【第3幕】

- N.13 セーヌ〈アルノール、この絶望はどこから生まれたのでしょうか？*Arnold, d'où naît ce désespoir?*〉（マティルデ、アルノール）と、マティルデのエール〈私たちの愛には、もう希望がありません *Pour notre amour plus d'espérance*〉（マティルデ、アルノール）
- N.14 行進曲と合唱〈最高権力に栄光あれ！*Gloire au pouvoir suprême!*〉（ゲスレル、スイス人と兵士の合唱）
— 行進曲と合唱の後のレシタティブ〈ドイツ皇帝がお前たちの服従を *Que l'empire germain de votre obéissance*〉（ゲスレル）
[ディヴェルティスマン]
- N.15 パ・ド・トワ（3人の踊り）[*Pas de trois*] とティロル人の合唱〈鳥も付いてこないお前！*Toi que l'oiseau ne suivrait pas!*〉（スイス人の小合唱、スイス人と兵士の合唱）
- N.16 パ・ド・ソルダ（兵士たちの踊り）[*Pas de Soldats*]
- N.17 第3幕フィナーレ [フィナル]
- 17-I ディヴェルティスマンの後のレシタティブ〈傲慢な者ども、頭を垂れよ！*Audacieux, incline-toi!*〉（ロドルフ、ギヨーム [・テル]、ゲスレル）
- 17-II 四重唱〈あれは恐るべき弓の使い手だ *C'est là cet archer redoutable*〉（ジェミ、ロドルフ、ギヨーム [・テル]、ゲスレル、兵士の合唱）
- 17-III 四重唱の後のレシタティブ〈お前の母のもとに戻れ、命令だ *Rejoins ta mère, je l'ordonne*〉（ジェミ、ギヨーム [・テル]、ゲスレル）
- 17-IV レシタティブ〈涙を流しつつ、お前を祝福しよう *Je te bénis en répandant des larmes*〉（ジェミ、ギヨーム [・テル]、ゲスレル、スイス人の合唱）とギヨーム [・テル] のエール〈じっと動かず、片膝を地につけ *Sois immobile, et vers la terre*〉（ギヨーム [・テル]）
- 17-V レシタティブ〈勝利だ！ 彼は助かった *Victoire! sa vie est sauvée*〉（ジェミ、ギヨーム [・テル]、ゲスレル、スイス人の合唱）と第3幕フィナーレ [フィナル] 〈なんてことを？ 恐ろしい犠牲だわ！ *Qu'ai-je appris? sacrifice affreux!*〉（マティルデ、ジェミ、ロドルフ、ギヨーム [・テル]、ゲスレル、兵士の合唱、スイス人の合唱）

【第4幕】

- N.18 レシタティブ〈私を見捨てないでくれ、復讐の希望よ！ *Ne m'abandonne point, espoir de la vengeance!*〉（アルノール）、アルノールのエールと合唱〈先祖伝来の住処よ *Asile héréditaire*〉（アルノール、スイスの同盟者の合唱）
— エールの後のレシタティブ〈どこに行くのですか？ 苦しみがあなたを惑わせています *Où vas-tu? La douleur t'égaré.*〉（ジェミ、エドヴィージュ、スイスの女たちの合唱）
- N.19 第4幕フィナーレ [フィナル] 〈私についてこい、私についてこい！ ギヨームがこの岸に打ち上げられる *Suivez-moi, suivez-moi! Guillaume sur ces rives*〉（ジェミ、エドヴィージュ、アルノール、ギヨーム [・テル]、ゲスレル、ルートルド、ヴァルテル、兵士の合唱、スイス人の合唱）

物語

【第1幕】

スイスのウーリ州ビュルグレンの山間の村。畑仕事をする農民たちの傍らでジェミが弓の練習をし、その父テルがもの思いにふけている。空が晴れるのを喜ぶ村人の前で、酒に酔った漁師リュオディが恋歌「私の小舟において」を歌う。のどかな歌声を耳にしたテルは、あらためて自由を奪われた祖国に思いを馳せる。

山間に角笛がこだまし、仕事を終えた村人が戻ってくる。今日は祭りの日、3人の若者が妻を娶るしきりがあり、長老メルクタールがおごそかに労働と結婚を称えると村人が華やかに合唱する（以上、N.1 導入曲）。

メルクタールの息子アルノールは一人残り、スイスを支配するハプスブルク家の皇女マティルデへの愛が祖国への裏切りになる、と悩む。彼はかつて雪崩にあったマティルデを救い、2人は恋に落ちていた。軍隊の角笛を聞いたアルノールは総督ゲスレルの存在を思い出し、マティルデに会いに行こうとする。そこに来たテルが「どこへ行くのだ？」と問いかける。テルが自由の尊さを説くと、アルノールは興奮してマティルデへの愛を口にする。テルはアルノールの苦しみを理解しながらも「祖国のために復讐しなければいけない」と訴え、ゲスレルとの戦いを決意させる（N.2 レシタティブ、アルノールとテルの二重唱）。

2人と入れ替わりに村人たちが現れ、メルクタールに祝福された3組のカップルの幸せな未来を祈ると、その光景を見たアルノールが苦い思いをかみしめる（N.3 行進曲、レシタティブと合唱）。結婚の神に新郎新婦への祝福を求

める合唱の間にバレエが踊られる (N.4 舞踏付きの合唱)。続いて「6人の踊り」が踊られ (N.5 パ・ド・シス)、弓の競技で高得点をあげたジェミが村人の喝采を受ける (N.6 舞踏付きの合唱)。

そこへ羊飼いのルートルドが駆け込んでくる。彼は村娘を襲ったゲスレルの部下を殺し、逃げてきたのだ。追手の兵士たちを見たテルは、命の危険を顧みずルートルドを舟に乗せ、急流に漕ぎ出す。村人が神に祈りを捧げて見守るなか、2人は無事対岸に逃れる。だが、安心した村人の前に兵士の一団が現れ、「ルートルドを逃がした者の名を言え」と迫る。「この村に密告者はいない」と答えたメルクタールが逮捕され、村人たちの非難と兵士たちの怒号が飛び交うなか引き立てられていく (N.7 第1幕フィナーレ [フィナル])。

【第2幕】

四つの州に面したルツェルン湖に臨むリュートリの丘。太陽が沈みかけ、狩から戻る狩人たちの勇壮な合唱と羊飼いの静かな合唱が歌われる (N.8 合唱)。

マティルデが現れ、不安にかられながらアルノールへの思いを吐露し、宵の明星に私を導いてくるよう訴える (N.9 レシタティブとマティルデのロマンス)。木立の間からアルノールが来て、2人は再会する。「身分の違う私に、異国に行って死ぬよう命じてください」と訴えるアルノールに対し、マティルデは「ここにいてください」と答える。マティルデは「たとえ破滅することがあっても、あなたへの愛は消せません」とアルノールを励まし、アルノールも「戦場で手柄を立て、あなたを迎えにきます」と約束する (N.10 マティルデとアルノールの二重唱)。

人の来る気配がしてマティルデが立ち去ると、テルとその仲間ヴァルテルが現れる。マティルデと会っていたことを知るテルから「彼女はわれわれの敵だ」と言われたアルノールは、「私たちに祖国はない、私はこの土地を去る」と答える。だが、ヴァルテルから父メルクタールが殺されたと教えられたアルノールは後悔し、父の仇をとると誓う (N.11 三重唱)。

スイスの三つの州、ウンターヴァルデン、ウーリ、シュヴィーツの男たちが、山を越えて歩いてくる。彼らはゲスレルとの戦いに立ち上がった愛国者で、テルたちに合流すると圧制者と戦うための同盟を結び、夜明けを合図に攻撃を始めると約束する。愛国者たちの合唱は徐々に熱を帯び、アルノールの呼びかけに応じて「武器を取れ！」と氣勢を上げる (N.12 第2幕フィナーレ [フィナル])。

【第3幕】

アルトドルフ宮殿の庭にある荒れ果てた礼拝堂。再会したアルノールから自分の父がゲスレルに殺されたと言われ、マティルデはショックを受ける。絶望したマティルデは「私の人生は始まったばかりなのに、私たちの愛の希望は失われてしまった」と嘆き、2人は永遠の別れを告げて去る (N.13 セーヌとマティルデのエール)。

アルトドルフの広場。ゲスレルを称える兵士とマティルデを称える民衆の合唱が歌われ、そこに現れたゲスレルは権力を象徴するトロフィーの前で跪くようスイス人たちに命じる (N.14 行進曲と合唱)。ゲスレルがドイツ皇帝の権力に服従して祭りを祝うよう命じると、3人の踊り手と合唱のバレエ (N.15 パ・ド・トワとティロル人の合唱) に続いて兵士たちのバレエ (N.16 パ・ド・ソルダ) が踊られる。

頭を下げようとしないうテルとジェミが見とがめられ、テルが弓の名手と知ったゲスレルは息子の頭にりんごを乗せて射落せと命じる。それを拒むテルはゲスレルの前に跪いて許しを請うが、ジェミに励まされたテルは意を決し、「じっと動かず、片膝を地につけ、神の加護を祈りなさい」と息子に言い聞かせる。

テルはジェミの頭に置かれたりんごを見事に射抜き、人々の喝采を浴びる。しかし2本目の矢を持つことを問いつまされ、「息子になにかあったらこれでゲスレルを射るつもりだった」と答え、息子と共に逮捕される。そこにマティルデが割って入りジェミを救うが、ゲスレルはテルの引渡しを拒否する。憤激する民衆の叫びに兵士たちが「ゲスレル万歳！」と応酬し、激しいアンサンブルで閉じられる (以上、N.17 第3幕フィナーレ [フィナル])。

【第4幕】

老メルクタールの家。荒れ果てた父の家を訪れたアルノールは亡き父に思いを馳せ、「先祖伝来の住処よ」と悲しみを歌う。だが、復讐を叫ぶ仲間たちが現れると奮い立ち、武器を取りに来るようと呼びかける (N.18 レシタティブ、アルノールのエールと合唱)。

ルツェルン湖畔の岩場。辺りは不穏な空気に包まれている。夫と息子が死んだと思ったエドヴィージュが嘆き悲しむ。そこにジェミとマティルデが現れるが、再会の喜びもつかの間、すぐに激しい嵐がやって来る。嵐の音楽の間に舟が岸に乗り上げ、飛び降りたテルはジェミから民衆に決起を呼びかけるため家に火を放ったと告げられる。テルがジェミから渡された弓でゲスレルを射倒すと人々から勝利の叫びがあがり、アルノールもマティルデとの再会を果たす。嵐が過ぎ、スイスの山々が光を浴びて輝きを取り戻すと、テルが「ここではすべてが変わり、成長する」と歌い始め、全員で「自由よ、天から降り来たれ」と唱和する (N.19 第4幕フィナーレ [フィナル])。

《ギヨーム・テル》 早わかり

日本で《ウィリアム・テル》の題名で知られる《ギヨーム・テル》は、ロッシーニ最後のオペラであると共にグランド・オペラの先駆けをなす重要作品である。ドイツの劇作家・詩人シラーの劇台本『ヴィルヘルム・テル』を原作にスイス・アルプス地方の民衆が自治と独立を獲得するまでを描き、台本はエティエンヌ・ド・ジュイとイポリート・ピスの2人がシラー劇のフランス語訳に基づいて作成した。1829年8月3日にパリのオペラ座で行なわれた初演は成功を取めたが、革命的なドラマであることからイタリアでは検閲をとらず、第三者による台本の改作や設定を変更したヴァージョンで流布することになった。

豊かな自然描写を含むこの作品では、スイスの民俗的な音楽素材をアレンジして用い（序曲と第4幕フィナーレ）、山々にこだまする角笛が4本のホルンで巧みに表現される。マティルデへの愛と祖国への愛の狭間で苦悩するアルノールの姿、圧制から民衆を救いたいと願うテルの性格も真摯で情熱的な音楽で表される。雄弁な管弦楽と共に合唱も活躍し、スイス人やオーストリア軍の兵士など、異なる社会集団の感情を表す役割を担う。第2幕フィナーレの政治集会も表面的な効果を狙わず、愛国者たちの誠実さと勇気が崇高な音楽で描かれる。

マティルデの歌う旋律は繊細かつ優美で、ロッシーニがフランス語の抑揚に沿った歌の様式を独自に確立したことが判る。第3幕と第4幕は素晴らしい音楽の連続で、ロッシーニがオペラ人生の最後に到達した、前人未到の高い境地が見て取れる。思わず襟を正したくなる雄大なフィナーレの印象も圧倒的で、自由と平和を希求するその音楽は、かつてイタリア国営放送が放送終了時に流していたことでも知られる。



初演の告知ポスター(1829年8月3日)

楽曲解説 (物語と音楽) 註：1995年ROF上演の追加変更、差し替えなどは各ナンバーの後に注記する。

序曲 (Ouverture) 次の四つの部分からなる。

註：各部分は「夜明け」「嵐」「静けさ」「スイス軍の行進」の副題でも知られるが、これはロッシーニと無関係に第三者が与えたもの。

- 1) 全47小節の序奏（ホ短調、3/4拍子、アンダンテ）はチェロのアンサンブル（五重奏+2ripieni+3ripieniの10人を想定）によるもので、2度介入するティンパニのトレモロが嵐の予兆をなす（チェロ重奏を用いる序奏は斬新で、後にメルカダンテやヴェリユオディにも影響を与えた）。
- 2) 嵐の音楽（ホ短調、4/4拍子、アレグロ）。徐々に激しさを増し、3本のトロンボーンとファゴットによる半音階の上向音型と打楽器がアクセントを与えるが、やがて半音階の下降音型で嵐の終息が暗示され、その末尾でフルート独奏が鳥の鳴き声を模倣する。
- 3) ト長調、3/8拍子、アンダンティエーノ。嵐の後の爽やかな自然がコルノ・イングラーゼ [イングリッシュ・ホルン] の旋律で表現され、フルートが美しく彩る。これはスイスの牛飼いの素朴な音楽「ラン・デ・ヴァシュ (Ranz des vaches)」の旋律を参考にしたもので、劇中に変形されて現れ、スイスの雰囲気を表すライトモチーフの役割を果たす。
- 4) トランペットとホルンのファンファーレで開始される輝かしい行進曲（ホ長調、2/4拍子、アレグロ・ヴィヴァーチェ）。1822年7月に滞在先のウィーンで作曲した音楽の転用とする説もあるが (Giuseppe Radiciotti: *Gioacchino Rossini. Vita documentata. Opere ed influenza su l'arte, I, p.471.*)、楽譜素材が現存しないため確定しない。

四つの部分からなるこの序曲は自然描写を取り入れた簡潔なシンフォニーであり、管弦楽法の点でもイタリア人作曲家の書いた最も進んだ音楽と言える。

【第1幕】

N.1 導入曲〈今日は晴れると空が告げている！〉

ビュルグレンの山間の村。空が晴れるのを喜ぶ村人の合唱に続いて2本のハープの伴奏で漁師リュオディが6/8拍子のバルカローレ（舟歌）を歌う（旋律にハイCを含む）。テルの関与を経て、バルカローレが四重唱のアンサンブルで繰り返される。続いて4本のホルンが呼び交わす（これはアルペン・ホルンを模している）。スイス人の合唱が祭りの準備を歌い、メルクタルによる「労働と結婚と愛」への呼びかけを受け、全員で厳かに合唱する。そして

ホルン信号を挟んで高らかな合唱となり、導入曲を締め括る（合唱はいったん退場する）。

N.2 レシタティブ〈人里離れた私の家が、日中の暑さから〉、アルノールとテルの二重唱〈どこに行く？ なにがお前を動揺させるのだ？〉

テルとメルクタールの短い対話を挟んで一人になったメルクタールの息子アルノールは、ハプスブルク家の皇女マティルデへの愛が祖国への裏切りになる、と悩む。そしてホルンの音（オーストリア軍の存在を暗示）を聞いてゲスレルの存在を思い出し、マティルデに会いに行こうとする（以上、レシタティブ）。そこにテルが来て、「どこへ行くのだ？」と問いかける。テルが自由の尊さを説くと、アルノールはマティルデへの愛を口にする。テルは「祖国のために復讐しなければいけない」と訴え、ゲスレルとの戦いをアルノールに決意させる。カバレッタに相当する部分は行進曲のリズムで歌われ、最後に「我々の圧政者に憎しみと不幸を！」と心をつなげる。

N.3 行進曲、レシタティブ〈我らの頭上に太陽が輝き〉と合唱〈世界を飾る天よ〉

メルクタールが3組のカップルを祝福する。静かな合唱が彼らの幸せな未来を祈り、その光景を見たアルノールが苦い思いをかみしめる。

ー 合唱の後のレシタティブ〈またもゲスレルだ！〉

狩りのホルンを聴き、テルが家族にゲスレルへの警戒を呼び掛ける。

註：1995年 ROF 上演はオリジナル・ヴァージョンのレシタティブを採用。

N.4 舞踏付きの合唱〈イメネ [結婚の神]、あなたの日が〉

スイス人の合唱が結婚の神に新郎新婦たちへの祝福を求めて歌い、その間にバレエが踊られる。

【ディヴェルティスマン】

N.5 パ・ド・シス (6人の踊り)

バレエ・シーン。3組の新郎新婦による6人のダンス（パ・ド・シス）。

註：1995年 ROF 上演はN.5に続いてN.5bis パ・ド・ドゥ（初演の第2夜からカットされたバレエ音楽）を演奏。

N.6 舞踏付きの合唱〈テルの息子に栄光と名誉を！〉

長い序奏の間にテルの息子ジェミが弓の競技で高得点をあげ、村人たちに喝采される。

ー ディヴェルティスマンの後のレシタティブ〈蒼ざめ、震えながら、やっと身を支え〉

急を告げる音楽と共に、村娘を襲ったゲスレルの部下を殺した羊飼ルートルドが駆け込んでくる。追手の兵士たちを見たテルは、ルートルドを舟に乗せて対岸に逃がそうとする。

N.7 第1幕フィナーレ [フィナル] 〈善なる神、全能の神よ！〉

村人たちが神に祈りを捧げて見守るなか、急流に漕ぎ出した2人が無事対岸に逃れる。安心した村人の前に兵士の団が現れ、「ルートルドを逃がした者の名を言え」と迫る。「この村に密告者はいない」と答えたメルクタールは逮捕され、村人たちの非難と兵士たちの怒号の飛び交うアンサンブル・フィナーレで幕を下ろす。

【第2幕】

N.8 合唱〈なんと野性的な〉

ルツェルン湖に臨むリュートリの丘。勇壮なホルンを伴う狩人の男声合唱で始まり、山で働くスイス人の格調高いハーブ伴奏の混声合唱を挟んで狩人の合唱が再帰する。

N.9 レシタティブ〈やっと彼らが遠ざかる…彼に見覚えがあるのが判ったわ〉とマティルデのロマンス〈暗い森、人けのない、悲しく荒れ果てた野よ〉

入れ替わりにマティルデが現れ、不安にかられながらアルノールへの思いを吐露する（レシタティブ）。続いて歌われる〈暗い森〉はカンタービレのゆったりと旋律の有節形式のロマンスで、荒れ果てた野に呼びかけ、宵の明星に私を導いてくるよう願う。

ー ロマンズの後のレシタティブ〈私が来たことは、たぶんあなたにとっての侮辱でしょう〉

アルノールが現れ、マティルデに自分の思いを告白する。そして「私が遠くに去るよう命じてください。私の運命に言葉を発してください」と優しく訴える。

N.10 マティルデとアルノールの二重唱〈ええ、あなたは私の魂から奪いました〉

「ここにいてください」とマティルデが答え、トランペットのひと吹きを合図に二重唱に移行する。マティルデに励まされたアルノールは、「戦場で手柄を立て、あなたを迎えにきます」と約束する。互いの本心を確認するこの二重唱は速い速度のテンポ・ダッタッコで始まり、中間部 3/8 拍子、アンダンティーノで美しい旋律のハーモニーを聞かせ、アレグロのカバレッタで締め括る。

一 二重唱の後のレシタティブ〈人が来ます、お別れしましょう〉

人が来る気配にマティルデが明日の再会を約束して立ち去ると、テルとヴァルテルが現れる。2人はマティルデの立ち去る姿を見ており、テルから「彼女は敵だ」と言われたアルノールは「この地を去る」と告げる。

N.11 三重唱〈ヘルヴェティエ [スイス] が処刑場になる時〉

静かな口調でテルがアルノールを非難し、ヴァルテルがメルクタールの死を教える。アルノールは自責の念にかられ、「もう彼女に会えない」と悲しむ。3拍子のゆったりとした二重唱のプリモ・テンポで始まり、テンポ・ディ・メツゾの中間部でアルノールは父の死が真実かどうか確認する。そして「独立か、さもなければ死!」とのテルの言葉をきっかけに、3人で復讐を誓う緩やかなテンポのカバレッタとなる。

N.12 第2幕フィナーレ [フィナル] 〈広大な森の奥底から〉

ティンパニのトレモロとホルンに導かれ、スイスの三つの州の男たちが山を越えて徐々に歩んでくる。ゲスレルとの戦いに立ち上がった愛国者たちはテルたちと合流して同盟を結び、夜明けを合図に攻撃を始めると約束する。愛国者の合唱は徐々に熱を帯び、アルノールの呼びかけに答えて「武器を取れ!」と氣勢を上げる。このフィナーレは合唱の合間にレシタティブを挟む形で進行し、モデラートの第1部分、アレグロ・ヴィヴァーチェの第2部分、トランペットのホルンのファンファーレを伴って力強く同盟を誓う第3部分からなる。その音楽と構成は後にヴェルディにも大きな影響を与えている。

註：1995年 ROF 上演はオリジナル・ヴァージョンの一部を追加。

【第3幕】

N.13 セーヌ〈アルノール、この絶望はどこから生まれたのでしょうか?〉と、マティルデのエール〈私たちの愛には、もう希望がありません〉

アルトドルフ宮殿の庭の礼拝堂。アルノールから自分の父が殺されたと聞き、マティルデがショックを受ける(セーヌ)。その下手人がゲスレルと知り、エール(アリア)となる。その前半部ではマティルデの絶望がアレグロ・アダジタートのパセティックな伴奏で歌われ(半音階の下降音型を交えた華麗なパッセージにも特色がある)、モデラートに転じての後半部はアレグロ・アニマーートの部分を挟んで感情が高まる。

註：オリジナル・ヴァージョンではアルノールも関与したが、ロッシニーは初演後にマティルデのソロに改作した。1995年 ROF 上演はオリジナル・ヴァージョンで演奏。

N.14 行進曲と合唱〈最高権力に栄光あれ!〉

舞台はアルトドルフの広場が変わる。ゲスレルを称える兵士とマティルデを称える民衆の合唱が歌われ、ゲスレルは権力を象徴するトロフィーの前で跪くようスイス人たちに命じる。

一 行進曲と合唱の後のレシタティブ〈ドイツ皇帝がお前たちの服従を〉

ゲスレルがスイス人たちに、ドイツ皇帝の権力に服従して祭りを祝うよう命じる。

【ディヴェルティスマン】

註：オリジナル・ヴァージョンは四つのナンバーからなるが、稽古段階で次の N.15 と N.16 に改変。

N.15 パ・ド・トワ (3人の踊り) とティロル人の合唱〈鳥も付いてこないお前!〉

合唱を伴うバレエ・シーン。アレグレット、アレグロ・ヴィヴァーチェ、アレグロ・マエストロで構成される。なお、ここでのバレエは兵士たちに強制されて踊られ、合唱はスイスのヨーデルを模している。

註：1995年 ROF 上演は末尾からオリジナル・ヴァージョンを採用。

N.16 パ・ド・ソルダ (兵士たちの踊り) [Pas de Soldats]

合唱なしのバレエ・シーン。アレグロ・ブリランテの華やかな音楽、アレグロ・ヴィヴァーチェの快活な音楽、プレストにテンポを速めた終結部からなる。以上二つのバレエはドラマと深い結びつきを持つ。

N.17 第3幕フィナーレ [フィナル] 次の五つの部分からなる。

17-I ディヴェルティスマンの後のレシタティブ〈傲慢な者ども、頭を垂れよ！〉

頭を下げようとしなないテルとジェミが見とがめられ、テルがゲスレルの前に引きずり出される。

17-II 四重唱〈あれは恐るべき弓の使い手だ〉

テルの大胆さに驚くゲスレル、不運を嘆くテル、勇気を示すジェミ、彼らに憐れみは不要と語るロドルフによる短い四重唱。

17-III 四重唱の後のレシタティブ〈お前の母のもとに戻れ、命令だ〉

テルはジェミに母のもとに戻るよう促すが、テルが弓の名手と知ったゲスレルは、息子の頭にりんごを乗せて射落せと命じる。

註：1995年 ROF 上演は初演直前にカットされたジェミの aria 〈Ah, que ton âme se rassure〉 (17-IIIbis) を挿入。

17-IV レシタティブ〈涙を流しつつ、お前を祝福しよう〉とギョーム [・テル] のエール〈じっと動かず、片膝を地につけ〉

弓を射るのを拒むテルはジェミにここを去るように言い、ゲスレルの前に跪いて許しを請う。しかし、ジェミに励まされると意を決し (以上、レシタティブ)、「じっと動かず、片膝を地につけ、神の加護を祈りなさい」と息子に言い聞かせる。これはチェロのオブリガートを伴う感動的な aria で、ヴァーグナーも絶賛した。

17-V レシタティブ〈勝利だ！ 彼は助かった〉と第3幕フィナーレ [フィナル] 〈なんてことを？ 恐ろしい犠牲だわ〉

テルはジェミの頭に置かれたりんごを見事に射抜き、人々の喝采を浴びる。しかし2本目の矢を持つことを問いただされると、「息子になにかあったらこれでゲスレルを射るつもりだった」と答え、息子と共に逮捕される。そこにマティルデが割って入りジェミを救うが、ゲスレルはテルの引渡しを拒否する。憤激する民衆の叫びに兵士たちが「ゲスレル万歳！」と応酬し、激しいアンサンブルで締め括られる。

【第4幕】

N.18 レシタティブ〈私を見捨てないでくれ、復讐の希望よ！〉、アルノールのエールと合唱〈先祖伝来の住処よ〉

荒れ果てた父の家を訪れたアルノールは亡き父に思いを馳せ、もうここに戻ることは無いだろうと独白する (レシタティブ)。エール〈先祖伝来の住処よ〉は、父を失った悲しみを歌うプリモ・テンポ、復讐を叫ぶ仲間たちの合唱に力を得て武器を取りに来よう呼びかけるテンポ・ディ・メツ、**「友よ、私の復讐を助けてくれ」「武器を取れ！」**と力強く歌うカバレッタからなる。テノールのハイ C が頻出することでも知られ、ここでの aria 形式は後にヴェルディの手本となった。

ー エールの後のレシタティブ〈どこに行くのですか？ 苦しみがあなたを惑わせています〉

アクセンバルクのみもと岩場。動揺するエドヴィージュを励ます女声合唱で始まり、ジェミとの再会までがレシタティブで語られる (全集版校訂者が単にレシタティブとしたのは疑問)。

註：1995年 ROF 上演はアルノールのエール以降にオリジナル・ヴァージョンを採用し、レシタティブの後にマティルデ、ジェミ、エドヴィージュの三重唱〈Je rends à votre amour un fils digne de vous〉 (N.18bis) を演奏。

N.19 第4幕フィナーレ〈私についてこい、私についてこい！ ギョームがこの岸に打ち上げられる〉

ルートルドが、「テルの乗った舟が岸に打ち上げられようとしている」と報せに来る。嵐の音楽の間にゲスレルと兵士たちの乗った舟が岸に乗り上げ、飛び降りたテルが足で舟を押し戻す様子が演じられる。テルがジェミから渡された弓でゲスレルを射倒すと勝利の叫びがあがり、アルノールもマティルデと再会を果たす。

嵐が過ぎ、スイスの山々が光を浴びて輝きを取り戻す。スイスの民俗素材に基づくホルンの旋律に導かれてテルが「ここではすべてが変わり、成長する」と歌いだし、全員で「自由よ、天から降り来たれ」と高らかに唱和して締め括る (N.19 第4幕フィナーレ)。フィナーレの音楽の崇高な美しさは、「後にヴァーグナーが肩を並べはしたが、凌駕できなかった」(リチャード・オズボーン)。

註：1995年 ROF 上演は第4幕フィナーレにオリジナル・ヴァージョン (N.19a) を採用し、レシタティブ、エドヴィージュと合唱の祈り (N.19a-I) に続いて N.19a-II を演奏。